

# 自分の考えを英語で表現できる生徒の育成

## —日常生活や学級・学校での関心事と関わらせた英語学習—

教育実践研究科 教職実践専攻 教職実践基礎領域  
井上由佳梨

### I はじめに

中学校の英語科の授業を組み立てる際に、私が大切にしたいと思っていることは、「コミュニケーションツールとしての英語を用いて、自分のことを話す」である。そして、話題やテーマについて、自分の考えをもち、英語で表現できる生徒の育成を目指したいと考えている。なぜならば、国際化の中で、自分の考えを英語で表現できることは、世界人として人間関係を築いていく上で大切であるからである。

このことから、中学校の英語科では、初歩的な英語を用いて基本的な会話ができる生徒を育てることを目指したい。英語を用いて、自分の言葉で伝えることで、相手に自分のことを知ってもらい、自信をもって人間関係を築いてほしい。

そのためのたぐいとして、生徒の日常生活や学級・学校での関心事を題材で授業を組み立て、生徒が自ら考えを表現できる場面を設定することを考えた。

主題に関わり、教職大学院の講義での学びのもとに、1年3ヶ月に及ぶ学校サポーター活動と、4週間の集中実習（教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ）、2週間の他校での実習（教師力向上実習Ⅲ）において英語科の授業実践をさせていただいた。連携協力校の生徒の実態を踏まえて、学習指導要領で習得が目標されている4技能のうち、特に「話すこと」の活動に焦点を当て、英語で表現させるための基本的な技能としての単語や文法を定着させるための題材を考え実践した。本稿では、このことを主に報告する。

また、学校サポーター活動や実習では、主に英語科のT2として参加させていただき、先輩の先生方から多くの授業技術や学習規律について学ぶことができた。さらに、朝の会、帰りの会での実践から、生徒の実態を掴むことについても学ぶことができた。本稿の後半では、このことについて、「学んだことがこれからの授業実践においてどのように生かすことができるか」を考察し、今後の教師への抱負を述べる。

### II 主題設定の理由

#### 1 生徒の実態

連携協力校の生徒は、日々の朝学習の時間を利

用した「ひとこと日記」や、行事毎に書く振り返りシートを通じて、自分の意見を明らかにすることに慣れており、短い時間の中で、用紙いっぱい文章を書くことができる。

しかし、英語科の授業で考えを述べる場面では、思ったことや感じたことを英語で話すための要素である「単語」「いい表し方(文法や決まった表現)」が分からないといった課題を抱える生徒が少なくない。そこには、英語を使用する場面が授業内に限られるという実態もあると考える。

そこで、日々の英語科の授業において、単語についての理解を深める活動や、日常生活に関わる考えを短い文で表現する活動を設けていきたいと考えた。

#### 2 学習指導要領が目指すもの

中学校外国語科学習指導要領では、英語の具体的な目標として「初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする」ことが示されている。与えられた語句や文を繰り返すことだけでなく、実際に英語を使用してコミュニケーションを図ることが目指されている。<sup>(注1)</sup>

また、小学校の外国語活動では、主に「聞くこと」「話すこと」の活動を通じて外国語に慣れ親しむ。中学校では、これらの活動経験を踏まえて「書くこと」「読むこと」の活動を取り入れることで、基礎的な英語のコミュニケーション能力を育むことが期待されている。

これらのことから、中学校の英語科では、「書くこと」「読むこと」の活動を通じて表現の幅を広げることで、より自分の言葉で話すことができるようになると考えられる。

そこで、自分の考えを話すことができる生徒を育てるために、英語科の授業の中で、与えられた題材についての考えを書き、学級内に伝える活動を取り入れていく。

#### 3 教職大学院の授業での学び

生徒が興味や関心をもって学習活動に取り組むために、生徒の日常や学級・学校の課題と関わらせた教材を取り入れることが重要であることを、次の3つの授業から学んだ。

##### (1) カリキュラムの構想と授業づくり

主に、教材の開発や手作り教材について学ん

だ。そこでは、児童生徒が日常で目にするものを取り上げた例が多く、提案された学習に対する意欲や関心をもたせる方法を学ぶことができた。私は、毎日食べる朝食をテーマとしたビンゴゲームを通じて、普段生徒が食べている朝食を想起させながら、海外の朝食文化を知ることができる活動を実施した。このゲームでは、生徒全員を指名して、新出の言語材料を用いた文を読む場面を設定することができた。何度も他の生徒の発言を聞くので、学習内容の定着を図ることができていると感じた。

## (2) 教授方法の研究

生徒の学びに、「いつか役に立つから」という視点ではなく、具体的にいつ役に立つのかという見通しを持たせることの大切さを学んだ。

また、今の学びの喜びを共有することが子どもたちの学習の意欲を形成していくことや、児童生徒の活動のなかに「学び合い」の場面を取り入れることが、学習を深めていくことを学んだ。<sup>(注2)</sup>

## (3) 指導技術力の開発

学生一人一人が興味のある教育者を取り上げて紹介し、理論に基づいた模擬授業を行った。私は阿原成光先生の実践を取り上げて、「自分のことを大切にしながら学習する英語科の授業」の模擬授業を行った。

阿原氏は、外国語の習得は共生の21世紀に生きる人間に必須の教養であり、「人間らしく生きる力」であると述べている。

阿原氏の教育では、英語学習という新しい経験の中で、一番大切な名前をきちんと見直し、その価値を見出して、自尊感情を十分にしておくことを大切にしている。自分のことについて話すことが、英語学習のモチベーションや動機付けとなるのである。<sup>(注3)</sup>

阿原氏の授業実践や研究から、英語科に対して苦手意識や抵抗を感じている生徒も、自分自身に焦点を当てて考えることが、英語への興味や関心をもたせることにつながることを学んだ。

以上の授業の学びから、主題に関わる授業実践では、生徒の興味のある題材を取り入れた単語の定着をさせる活動、協力して答えを導き出す活動、自分の意見を書いて発表する活動を意識的に取り入れることにした。

## III 研究の内容

### 1 基本的な考え方

#### (1) 目指す生徒の姿

現代はグローバル化が進み、「世界語」としての英語という見方が高まっている。世界語で話すことは、意思疎通を図るために必要である。

たとえば、オリンピック等で活躍するアスリートが、報道陣のインタビューに答える様子を目にするが、世界語（英語）で対応していることが多い。通訳を介さずに自分の言葉で話すことができれば、もっと自分というものを知ってもらえることができる。このように、ダイレクトに自分の言葉で伝えることが大切なのである。

日常生活に立ち戻って考えると、日本で英語が話せないことで日常生活に支障が出ることは少ない。しかし、英語を話すことができるということは、海外の文化を知るために不可欠である。ただ日本語に訳されたものを見聞きするのではなく、自信をもって直接情報を得ることで、視野が広がると考える。人に頼ることなく情報を得ることができるということは、人間としての自律をするということでもあると考える。

英語を用いて自分の意見を伝えることができるようになるためには、他者と英語で話す機会が必要である。しかし、日本に居住している限り、英語で他者と話す機会は決して多いとは言えない。その中で、英語に必要感をもたせて学校での英語学習に取り組ませるためには、日常の身近な話題について意見を述べる活動や、日本の文化を英語で伝える活動をするのが有効であると考えられる。

自分の考えを英語で表現するためには、日々の授業の中や家庭学習において、単語や表現の理解を深める活動を積み重ねることである。中学校における英語の授業では、そういった基本的な能力を育みつつ、与えられたテーマについての意見や考えをもつ、機会を積極的に取り入れ、自分の考えを英語で表現できる生徒を育みたい。

#### (2) 研究の仮説

生徒にとっては、学校生活が生活の大部分を占めるため、興味関心は学級・学校での話題に集中することがある。こうした生徒の興味関心について英語で考えることは、学習を深めるために有効であると考えられる。

1時間の授業の中で、テーマについて自分の考えをもって学級に伝えるには、扱う題材が、考えをもちやすく身近なものであることが求められる。

そこで、日常生活や学級・学校での関心事と関わらせた題材を取り上げて示すことで、英語を身近に感じながら考えを表現できる学習をすることができると思う。

日常生活と  
関わらせた教材



自分の考えを  
もちやすい

### (3) 実践のてだて

実践単元「Unit 4 Homestay in the United States」, 「Unit 5 A New Language Service」英語を用いて自分のことを話すためには、学習の段階を踏まえ、以下のてだてを実施していくことが有効であると考えた。

- 第1段階 単語の定着活動
  - ＜てだて1-1＞ 辞書引き
  - ＜てだて1-2＞ 漫画の台詞作り

英語を話すための材料として最も基本となるのは単語である。第1段階では、単語の意味はもとより、発音の仕方或使用場面についても指導し、理解を深めていきたい。

自分の考えを表現するためには、授業で扱う新出単語が基本となるが、この範囲では表現しきれない場合がある。

そこで、＜てだて1-1＞として、積極的に辞書指導を取り入れる。辞書の使い方は、中学1年生の教科書で学習するが、生徒がより自分の考えを豊かに表現するために、毎時間の授業で辞書を扱う場面を設定していきたい。辞書を使うこと自体に慣れることで、進んで単語の理解を深めようとする姿勢を身に付けさせることができると思う。

さらに、＜てだて1-2＞として、漫画の台詞を考える活動を行う。辞書引きの応用的な内容である。漫画の英語版を取り上げて、登場人物の台詞を考える。漫画は、生徒にとって身近な題材であるので、興味をもって活動に取り組むことができると思う。

- 第2段階 文法の定着活動
  - ＜てだて2＞ グループワーク

単語の意味を確認することができたら、第2段階として、文法の定着活動となる。基本的には、新出単語を取り入れた文の反復練習や音読を行う。文構造の確認や、一つの文を自然な抑揚を付けて音読することで定着が図れると思う。

より生徒の文法理解を深めるために、＜てだて2＞として、学級の仲間と協力して課題に取り組む場面を設定したい。自分とは異なる意見を聞きながら課題に取り組むことで、活動の中で生徒同士が学び合いながら学習を進めることができると思うからである。

学び合いながら学習ができるということは、一方が

他者に、自分の見方や考え方を根拠立てて説明できる。この段階の説明とは、課題や問題について日本語で考えを述べることであるが、他者に説明ができることは、自分なりに学習内容を理解しているということの表れである。協力して課題に取り組む文法の定着活動は、英語を用いて自分のことを話すための段階的な学習として効果的であると思う。

- 第3段階 与えられたテーマについて、  
自分の考えを短い文で表現する活動  
＜てだて3＞ 日常に関わるテーマ設定

自分の考えを表現するのが第3段階である。授業で学習したり調べたりした単語や文法を用いて文を組み立てていく。そこでは、＜てだて3＞として、前段階までに学習した単語や文法を用いて、生徒の日常生活に関する題材や話題について考えを表現させる。

学習内容の定着と、より実践的な英語コミュニケーション力を身に付けさせるために、毎回の授業にて自分の考えを書いたり、学級内で発表しあったりする活動が有効であると思う。

### (4) 実践の進め方

- ① 実戦対象学年 中学2年生
- ② 実践単元

New Horizon 2

Unit 4 Homestay in the United States

Unit 5 A New Language Service

- ③ 実践期間

平成25年10月4日(金)第2時限

平成25年10月28日(月)第3時限

- ④ 実践の内容

本実践では、生徒が課題を自分のこととして捉えながら学習できるよう＜てだて＞として、以下の点に着目をして教材選択を行った。

- ・生徒の関心事(校内事例)
- ・生徒が実際に行く予定のある場所に関するもの
- ・生徒の興味関心に沿ったもの
- ・外国の文化を知ることができるもの

英語をコミュニケーションツールの一つとして捉えて円滑に導入していくために、自分の生活と関連づけて具体的な事柄をイメージできることが大切であると考えた。そこで、サポーター活動中の生徒との会話や学校行事の内容を参考に、できるだけ生徒の実態に合わせた教材選択を試みた。

- ⑤ 生徒の実態と具体的なてだて

サポーター活動を通じて、連携協力校の生徒の以下の2点の実態に着目した。そこで、英語の学習をより深めるために、次のような具体的なてだて1～4を考えた。

実態1 意見を述べる際に英語での言い方が分からない  
→単語や新出の表現を定着させる活動

<手立て1-1>	辞書引き	} 第1段階
<手立て1-2>	漫画の台詞を考える	

実態2 英語で話す機会が少ない

→授業内で英語を話す活動の充実

<手立て2>	グループワーク	第2段階
<手立て3>	日常に関わるテーマ設定	第3段階

⑥ 実践計画

連携協力校では、限られた授業時数の中での実践であったため、<てだて1～3>を連続して行うことができなかつた。そこで、実践(1)では<てだて1-1, 1-2, 3>を行い、実践(2)では<てだて4>を行った。

⑦ 指導計画 (学習活動内容)

実践(1)

導入	1 辞書引きをする。 教師が発音・板書した単語を英和辞書で調べる。	第1段階—<てだて1-1>
	2 漫画の台詞を考える 作品中に登場する新出単語を調べる。 調べた単語を用いて、学習シートの吹き出しに、日本語のセリフを書き込む。 書き込んだ内容を発表する。	
展開	3 新出の言語材料(because) の学習をする。(第2段階)	第3段階—<てだて3>
	4 制服について考える 学習シートに自分の考えを記入する。 ペア同士で発表する。 学級全体に発表する。	
終末	5 本時のまとめをする。	
	6 自己評価シートを記入する。	

実践(2)

導入	1 新出単語の確認をする。(第1段階)	
展開	2 新出の言語材料 (must not) の意味・文構造を確認する。	第2段階—<てだて2>
	3 班毎に協力して答えを考える。 班毎に分かれて課題に取り組む。答えを掲示用の用紙に書き込み、終わった班から黒板に掲示する。後に全員で答え合わせをする。	
終末	4 本時のまとめをする。	
	5 自己評価シートを記入する。	

2 実践内容

(1) 第1実践

平成25年10月28日(月)第3時限

<てだて1-1, 1-2, 3>の実践

単元 Unit 5 A New Language Service

本時の目標

- ・英和辞書の使い方が理解できる。
- ・because節を用いた文の形・意味・用法を理解できる。
- ・because節を用いた文の形・意味・用法を用いて自分の意見を表現できる。

<てだて1-1 辞書引き>

① 活動の意図

本時の目標を達成するための基礎的な力を身に付けるために、授業の導入で辞書を引く活動を設けた。これは、授業中に辞書を引くことを習慣付けることで、意見を述べる際の資料として生徒が自ら辞書を使っていくことを目指すものである。

紙ベースの辞書を用いることの価値は他にもあると考える。中学校の授業で用いられる辞書は、辞書の使い方を確認するだけでなく、派生語や対義語を含む、単語についての付加的な知識を得ることができる。

また、その単語が実際の場面で使用される例が紹介されていることもあり、単語についての理解を深めることができると考える。

本活動は、授業や家庭学習において生徒が自ら辞書を引くようになるために、まずは、授業中に辞書を机上に置く習慣を付けて使わせる指導を徹底していくことから始めることにした。

② 指導上の留意点

- ・引き終わった者から起立させる。
- ・10人起立したところで止めて意味を発表させる。
- ・辞書の引き方を確認した上で再度取り組ませる。

③ 授業の様子

活動の冒頭では、机上を整頓させた。机上には辞書のみとし、生徒が活動に集中できる環境を作った。

活動のルール説明は主に英語で行い、生徒が理解しにくいと感じた箇所は日本語で補足的に説明を行った。実際に辞書を手にとり、ジェスチャーを交えて行ったため、大方の生徒は理解しているようであった。

スピード感とゲーム性があり、作業自体が単純な活動であったため、学級全員が積極的に参加していた。

教師が起立した人数を one, two, three, ... と数えていくと、生徒が10位以内に入ろうと一所懸命辞書を引く姿が見られた。日々の学習では挙手することが少ない生徒が起立して、答えることができた。10人起立して、教師が「Stop!」と区切ったあとも、「今、見つけた!」「あった!」と声を上げる

生徒がいたので、その生徒の方を向いて「OK。見つけたんだね。」と認める声掛けをした。起立している生徒に意味を答えさせる際に、着席している生徒にも声を掛け、ページ数等を発表させた。

自己評価シートの感想欄には、「辞書引きが楽しかった」「思ったよりも引くのが遅かった。これからはもっと引こうと思う」と、辞書引きの活動を取り上げる生徒が多く、生徒にとっては新鮮な体験となった。

#### ④ 成果

活動の中で、辞書の使い方の確認と、単語についての付加的な知識（対義語や派生語、実際の使用場面を紹介したコラム）を確認することができた。

本時のような辞書引きの活動は初めてであったため、ルールの確認に時間がかかったが、習慣的に取り入れていくことでより円滑に活動を進めることができることが分かった。

#### ⑤ 課題

本活動の課題点は二点あると考える。

一点目は、10人起立して活動を止めた後、まだ座っている生徒も引き続けるのか待機するのか、指示を明確にしていなかった。そして、教師による説明の際に、単語の掲載ページ数を黒板等に示していなかった。「この単語はなかなか見つからないね」「見つけても立っていない人はいない?」「〇〇はいつも早いね」等の声掛けで、常に生徒を見ていることを示しながら、学級全員が該当ページを確認できているかを把握して、指示を示す必要があった。

二点目は、引いた単語にマーカーや付箋で印をつけさせる指導をしていなかった。本時では学校の辞書を用いて活動を行ったため実施できなかったが、生徒が辞書を持参した場合、欠かさず行ってほしい。なぜならば、一度引いた単語に印を付けることで、後に確認がしやすいことと、生徒の学習の記録となるからである。授業で扱った学習内容を、生徒の手元に残すことができるのである。

さらに、辞書引きの後に、調べた単語の意味を書かせる学習シートを用いたり、各自のノートにメモとして残したりする指導を行うことで、家庭学習等で復習ができるようにする必要があった。

### 〈てだて1-2 漫画の台詞作り〉

#### ① 活動の意図

英語版の漫画を用いて、登場人物の台詞を考える活動を行った。

本時で用いた「ONE PIECE」という漫画を用いた意図は二点ある。

一点目は、本題材は、生徒の間で人気のある漫画を取り上げたということである。教職大学院の授

業から、生徒に身近なものを教材として取り入れることで、学習内容への興味・関心をもたせることにつながるという学んだ。そこで、本題材が、馴染みのあるイラストを交えながら学習ができるので、英語学習に抵抗を感じている生徒も前向きに活動に取り組むことができると考えて使用した。

二点目は、日本の漫画という文化が、海外にどのように広まっているのかを知る機会とすることである。単行本のサイズが日本版と異なることや、文字が全て大文字で書かれていること等、生徒にとっては目新しい切り口で題材を示すことができると考えた。

#### ② 指導上の留意点

- ・ 学習シートの説明をした後に、登場人物の台詞を書き込ませる。まずは一人で考えて、後に生徒同士で相談させる。
- ・ より自然な日本語や、場面に合った話し方で訳すように指示する。

#### ③ 授業の様子

活動の冒頭で題材を示すと、その地点までは机に肘を付けていた生徒が、体を起こす様子が見られた。学級全体では、周りの生徒と相談したり、辞書を引きながら、吹き出しに台詞を書き込んだりしていた。

机間指導の際に、意味を知っている単語であっても、セリフ中の“See?”等の口語で書かれている部分に戸惑って、「これで合っていますか?」「直訳だと変な感じになる。」等と、自信をもって書き込むことができている生徒がいた。そこで、「まずは、単語の直訳を書いてごらん。その後言い方を変えてみよう。」と声掛けをすると、吹き出し内を埋めることができた。

書き込んだ内容を発表する場面では、進んで挙手をする生徒は少なかった。しかし、机間指導中に生徒が書き込んだ内容を把握した上で指名すると、“See?”の訳として、「ほらな。」「見えるだろ?」等と答えることができた。発表された内容を学習シートにメモする生徒も見られた。

#### ④ 成果

本活動で使用した漫画「ONE PIECE」は、生徒の間では人気で、プロジェクターに示した際には、とても興味をもって注目させることにつながった。

普段読んでいる漫画の英語版を読むことを通じて、英語版特有の表記の仕方（全て大文字であることや、特殊なフォントを使用していること）や口語で書かれた台詞に触れ、身近な漫画を通じて英語を学習する機会となったと考える。



【資料1 使用した漫画の場面】

### ⑤ 課題

本活動の課題点は二点あると考える。

一点目は、資料から読み取る情報が多く、活動全体の時間がかかりすぎたということである。活動の初めにモデルを示して丁寧に説明を行い、焦点を絞って台詞を書かせることが必要であったと感じた。

二点目は、口語での英語のセリフが多いために、戸惑う生徒がいたことである。活動のねらいである「英和辞書の使い方が理解できる」ための前段階として、漫画の特徴や場面の背景を説明して、生徒が登場人物の様子を想像しながら台詞を書き込むことができるよう指導する必要がある。

自己評価シートの感想欄には、「漫画が面白かった」と書く生徒が多かったが、学習内容を定着させていくために、以上のことに解決して活動を行わなければならない。

### <てだて3 日常に関わるテーマ設定>

#### ① 活動の意図

(2)で示した3つ目の段階である。単語や表現を確認した上で、与えられたテーマや課題について、本時の言語材料を用いて自分の考えや気持ちを表現していく。本時は、書いた内容を他者に話す・発表する機会を設けた。

#### 基本文

I'm for school uniform  
because it's very cute.

題材は、サポーター活動中に生徒の間で話題となっていた、制服の賛否について取り上げた。生徒にとって最も身近な関心事の一つであるため、自分のこととして課題を捉えて考えることができると

考えて選択した。

#### ② 指導上の留意点

- ・ 生徒にとって身近な制服を取り上げて、良いところや課題を考えさせる。
- ・ for の意味を確認する。また、反対の意思を表す against を紹介して、意見を書くことができるように指導する。
- ・ 記入させる際には、辞書を進んで用いるように指導する。

#### ③ 授業の様子

教師がモデルとして“I'm for school uniform because it's very cute.”等を示した後の個人で考えを書く場面では、生徒が自ら辞書を用いて単語や表現を調べて書いていた。近くの席の生徒と相談しながら書く生徒もいた。

机間指導中に、日々の英語の授業にはあまり積極的でない生徒が、「リボンが嫌いってなんて言うの。」「これで文法合ってる？」等と友人や教師に質問し、活動を進めている様子が見られた。「私はリボンが嫌い」はどのように言いますか。」という問いに“I don't like ribbon.”と答えたので、名詞の前に冠詞 the を付けることを指導した後に、続けて一つの文として記入するよう指導した。後の発表の際には、挙手をして発表することができていた。

1. I'm  $\left\{ \begin{array}{l} \text{for} \\ \text{against} \end{array} \right\}$  school uniform (because) I don't like the ribbon.

I'm against school uniform

because I don't like the ribbon.

【資料2 Kさんの記述】

#### ④ 成果

本活動は、学級の生徒のほとんどが興味のある話題であったようで、自ら辞書を手に取り活動を進めている姿が見られた。導入での辞書引き活動を受けて、円滑に辞書を用いることができていたようである。学級の全員が学習シートに考えを記入することができた。

記入の内容について、ある生徒は、前の単元で学習した have to の表現を用いて書くことができていた。

1. I'm  $\left\{ \begin{array}{l} \text{for} \\ \text{against} \end{array} \right\}$  school uniform (because) I don't have to choose clothes

I'm for school uniform

because I don't have to choose clothes.

【資料3 Sさんの記述】

#### ⑤ 課題

本活動の課題点は二点あると考える。

一点目は、考えを学習シートに記入する際に、初めから英語で書くように指示をしたことである。記入に戸惑っている生徒には、まずは日本語で書き、易しい日本語に言い直して考えをまとめたあとに英語で書くよう助言する必要があった。

二点目は、個人で考える時間の後に、ペアにインタビューして聞き取った内容をメモする活動を設けたが、単語の綴りが分からず戸惑う姿が見られたことである。本活動の場合は、①個人が考えた意見を全体に発表させて教師が板書した後に、②その内容を音読させて練習し、③学習シートにメモをとらせる、という指導の順番の方が適切であったと考える。

本活動は、1時間をかけて討論することのできる題材であったので、授業時数を確保できる場合は、複数時間にわたって考えをまとめたり、意見を伝え合ったりできる題材であると考え。

(2) 第2実践 平成25年10月4日(金) 第2時限  
 <てだて2>の実践

単元 Unit 4 Homestay in the United States  
 本時の目標  
 ・ must not の表現が理解できる  
 ・ 英語らしい発音で英文を読むことができる。

本時は、第2段階(文法の定着)にあたる<てだて2>の実践を行った。第1段階(単語の定着)は、授業の前半にて、連携協力校の先生が普段されているご指導を模倣的に行い、単語の定着活動を実施した。

<てだて2 グループワーク>

① 活動の意図

連携協力校では、3年生時の修学旅行でディズニーランドへ行くことになっている。そこで、本時の新出の言語材料である must not の理解を深める活動として、園内でのルールやマナーを話題に取り上げたゲームを実施した。

② 学習活動と指導上の留意点

学習活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> <li>6班作る。</li> <li>右前の席の生徒から時計回りに1人ずつ、教卓上の封筒からカードを取り出す。</li> <li>カードに書かれた文を読み、空欄に can, must, must not のいずれかを選んで紙に全文を書く。</li> <li>一番早く、全文を正確</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>班毎に相談しながら答えを書き込むように指示する。</li> <li>記入した紙は黒板に掲示するので、大きく書くよう指示する。</li> <li>全て終わった班は、内容をよく確認するように指導する。</li> </ul>

に書き終えたチームの勝ち。

※ 本時で紹介したルールやマナーは、連携協力校の本年度の修学旅行で作成された旅行のしおりと、ディズニーランドがHP上で紹介しているものを参考に作成した。

カードの内容

- ① You can take pictures.
- ② You can write letters and send to your friend.
- ③ You must sit down during the show.
- ④ You must show your passport to use attractions.
- ⑤ You must not give birds food.
- ⑥ You must not bring food.

③ 授業の様子

修学旅行の内容という題材に、生徒は関心をもつことができた。活動中は、自分が体験したことのあるアトラクションやショーを見たときのことを班員に話す等、自分が実際に現地へ赴いたときのことを想像しながら問題文に取り組んだ。

机間指導中は、生徒同士が協力して課題に取り組む様子が見られた。問題文③では、「え、座って見るの?」「どっちだろう…」等と、文法学習の他にも、題材について話し合う姿があった。単語の理解が十分でない生徒は、班のメンバーに意味を確認しながら取り組んでいる様子が見られた。

ある班では、問題文⑤ You must not give birds food. の意味が分からず話し合っていたが、班員の一人が【give+人+物】の決まった表現を用いた文であることに気付き、他の班員に説明をしていた。

選択肢の can, must, must not については、ほとんどの生徒がその違いを理解して活動に取り組むことができていたと感じた。

答え合わせの際に、問題文②で取り上げた手紙を投函するポストの写真を提示すると、学級の女子生徒たちが「ほんとにできるの?」「手紙書いて持って行こう。」と声を上げている姿が見られた。

④ 成果

修学旅行で訪れるテーマパークを話題にすることで、生徒に興味関心をもたせることができた。また、生徒同士が相談しながら書く活動なので、協力しながら取り組むことができた。自己評価シートの記述からも、題材に興味関心をもって取り組むことができた生徒が多いことが分かった。

本活動は、生徒が教卓まで来て封筒からカードを取り出したり、大きな台紙に答えを記入したりする等、普段とは異なった形態で学習を進めたため、大変活発な活動となった。生徒が目や体を動かして学

習することができた。

#### ⑤ 課題

本活動は、二つの学級にて実施した。短時間の集中や素早い反応が得意な学級と、活動を正確に丁寧に行うことが得意な学級とがあり、学級の実態を捉えて授業を進めていく力が不足していることがわかった。その中で、課題点は二点あると考える。

一点目は、課題の示し方である。本時は、新出の言語材料 **must not** と、既習の **can**, **must** から正しい答えを選んで空欄に書かせていった。しかし、この方法では単に意味の違いを考えることに留まり、十分な学習ができるとは言えない。問題文中のどの部分に当てはめればよいかを合わせて考えることで、活動のねらいである「**must not** の表現が理解できる」ことを達成することができると思う。

どこに **must** を入れるとよいかを考えさせる。

↓ ↓ ↓ ↓ ↓  
**You sit down during the show.**

二点目は、活動が早く終わってしまった班が時間を持て余してしまったことである。丁寧に見直しをさせたり、掲示用にした6つの文を、自分のノートに書き写したりするよう指示したりして、生徒が課題に集中することができるように指導していきたい。または、全て回答し終わることができなくても、時間を区切って活動を止めさせて、教師と一緒に確認を行う指導をしていきたい。

#### IV 研究のまとめ

今回の実践を通じて、日常生活や学級・学校での関心事と関わらせた題材を用いた学習をすることが、生徒が英語で話すためのモチベーションとなることが分かった。

題材は、サポーター活動や実習を通じた実態から選び、教材として取り入れたが、授業内での深め方が不十分であった。特に、制服について考える活動では、複数時間を通じて考えさせて、生徒がじっくりと考える内容とするために、学級全体で意見を交換する場面を設定する等を行っていきたい。

今回の実践を生かして、効果的な題材の示し方や、活動のさせ方をさらに研究していきたい。

中学校の英語科では、英語が話せるための基本を学習する。そこでは、あらゆる話題について英語で考える練習を重ねることで、自分の考えを英語話者に発信できる。英語が話せるということは、異文化の人の意見や考えを直接尋ねることができるということなので、物事の考え方の視野が広がる。さらに、自分の力で情報を得ることができるので、その人自身が自信をもって生きていくことにつながる

と考える。

また、授業を組み立てるためには、生徒の実態や特徴を細やかに捉えることが大切であると学んだ。同じ題材であっても、学級毎の特徴に合わせて、学級の全員が学習目標を達成できるように、目標への迫り方を変えていかねばならない。選んだ題材を中心に、生徒の生活面や学習面での実態に合わせて、取り組ませる学習内容を組み立てていくことができるようになりたい。

実践中は、授業を行うための前提として、教師の話聞く姿勢作りや、挙手をして指名されたら責任をもって大きな声で発表すること、机上进行して集中して活動に取り組むことが必要であることを学んだ。実践全体を通じて、その指導の基本を身に付けることができたと感じ、今後の教師生活において、さらに向上させていきたい。

#### V 主題以外での学び

大学院2年間のサポーター活動や実習全体を通じて、先生方の業務について学んだり補佐をさせていただいたりする中で、「授業規律の作り方」と「教室環境の整備」についての取り組まれ方が、これからの教師生活において大変参考になった。1, 2では、その中で特に学ぶことができた内容を述べる。

さらに、3では、実習中にさせていただいた「スピーチ活動」について報告する。

##### 1 授業規律について

—先輩の先生方から学んだこと—

###### (1) 聞く姿勢を整える

朝の会や各授業で指示や話をする際には、事前に生徒の聞く姿勢を整えることを実践されていた。頭だけではなく、身体を前に向けさせた。話し手に注目することで、全員が集中して指示や伝達事項を聞くことができると学んだ。

###### (2) 机上、机周りの整頓

授業中は、生徒の机上が常に整頓されていた。このことに着目して授業を参観していると、先生方が以下のような指示を心掛けていることに気づいた。

① 必要な学習用具以外は片付ける。

② 活動で使用した教材で、ペン等の生徒の集中を妨げるようなものは、活動が終わった時点で回収する。

以上のことを、学年で一貫して指導を行っていくことで、生徒の学習環境を習慣的につくっていくことができると学んだ。

###### (3) 指示を明確に出す —目標を持たせる工夫—

生徒の学習活動では、活動の冒頭にて目標を

明確にする必要がある。

サポーター活動中や教師力向上実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの授業参観では、どの先生も活動の初めに「・・・をするために、今日は〇〇を学習します」と活動の意義や意図を話されていた。一つのゴールをもちながら学習することで、学習への意欲や課題意識が高まることを学んだ。

## 2 教室環境の整備

### (1) 清掃の取り組み方

教室を清潔に保ち整理整頓をすることで、誰もが快適に学校生活を送ることができるようになることを学んだ。毎日の掃除を生徒とともに丁寧にやることや、積極的に掃除に取り組んでいる生徒に賞賛の言葉掛けをしていくことを実践していくことで、学級全体の「教室をきれいに保つ」意識が育つと学んだ。

また、「机の横に手提げ等の大きな荷物を置かない」「机上は常に整理した状態で授業に臨む」等の決まりを徹底することが有効であると学んだ。来年度からの勤務では、「みんなが気持ちよく教室で生活ができるために、どのような工夫ができるか」を生徒自身に問いかけて、生徒から出された意見をもとに決まりを作り、学級全体で守ることができる実践をしていきたい。

### (2) 教室掲示の工夫

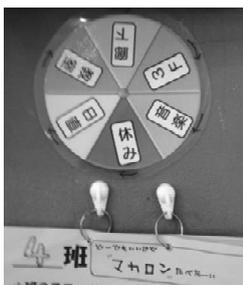
連携協力校では、生徒の掲示物を以下のように工夫して掲示されていた。



#### ①教室前面の当番表

班毎に、5枚ずつA4サイズの画用紙を準備している。各用紙には、各掃除場所の仕事内容、曜日毎の各個人の役割が、使う道具まで細かく記され、分担できる

ようになっている。「欠席者のヘルプ」欄もあり、全員で活動できるよう工夫されている。この表は、4月当初に作成し、1年を通して使用する。



#### ②当番表の中心部分

中央の円形の紙はラミネートされ、壊れにくい。週毎にまわしていく。また、班毎に作成されている5枚の画用紙は、パンチで開けた穴の部分が補強され、こちらも壊れにくい。学級全

員で、1年を通じて大切に使用していくために私も是

非このような実践をしていきたい。

### (3) 掲示物や賞状を大切に扱う

連携協力校では、学校行事等での賞状や掲示物を教室に掲示する際に、画用紙やラミネートを用いて教室前面に掲示をされていた。教師が教室の掲示物を大切にしていけることで、生徒が教室やものを大切にすることができることにつながると学んだ。

## 3 教師力向上実習Ⅰでの実践

### —スピーチ活動を通じて—

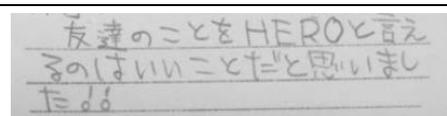
#### (1) ねらい

- ① 学級の仲間のことをもっと知る
- ② 自分の意見を書く、伝えることができる

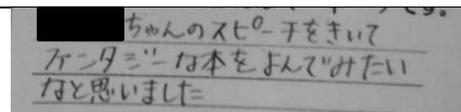
#### (2) 活動の様子と考察

教師力向上実習Ⅰの実践では、帰りの会において「わたしのHERO」というテーマに沿った短いスピーチを発表させた。聞き手は、内容についてのコメントを書き、後日まとめて本人に渡した。

指導の際には、必要であれば発表原稿を準備するよう指導することや、書くことができない生徒に対して、書き方のポイントを一緒に確認すること等の助言をして書かせた。



「友達のことをHEROと言えるのはいいことだと思います。」【Mさんの記述（活動前半）】



「H ちゃんのスピーチをきいて、ファンタジーな本をよんでみたいと思いました。」

【Mさんの記述（活動後半）】

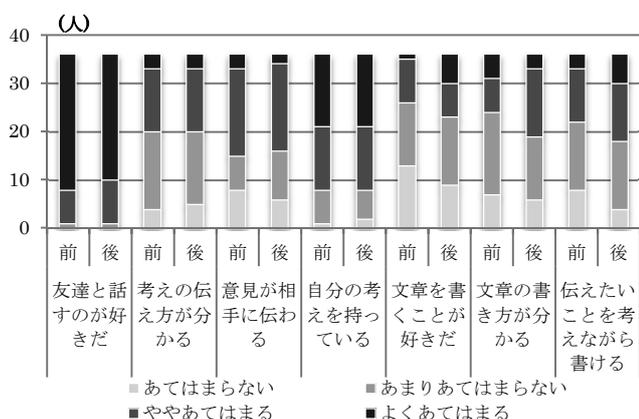
2枚のカードは、学級の生徒が、実践の前半(上)と後半(下)において作成したものである。前半では、学級の仲間に対して共感している。しかし、自分のことと関連させて書こうとする姿勢があまり見られなかった。後半では、話し手の話しぶりや内容に加えて、「自分だったらこのようにする」という内容を盛り込んで書くことができていた。また、この生徒は、事後のアンケートにおいて「話すこと」と「書くこと」の両方について示すポイントが大きくなっていった。スピーチの内容を自分のことと照らし合わせて書くことで、学級の仲間と自分を関わらせるコメントを書くことができていくと考える。

活動の「教師によるまとめ」では、回収したコメントカードを抜粋して匿名で読み上げることで、感想を發表しなかった生徒が、スピーチ内容に対して感じていることを学級と共有できるよう工夫したところ、毎日コメントカードを書く中で、自分の意見や内容に共感したことを記述する生徒の数が増えていった。

### (3) 成果と課題

4週間という限られた期間での活動ではあるが、生徒が「話すこと」や「書くこと」に対して慣れていく様子を捉えることができた。学級において自分のことを話す機会を設けることで、自分と向き合い、考えることは大切であると考えます。

また、実践の初日と最終日には、生徒の「話すこと」や「書くこと」に対する感じ方の変容を捉える参考として、アンケートを実施させていただきました。



#### 【アンケート結果】

今回は、スピーチ内容について「そのHEROと出会った時」「なぜHEROと呼べるのか」という項目を入れながら話すよう指示した。しかし、聞き手は、取り上げられた人物やものについての情報が少なく、理解に時間がかかってしまう場面が見られた。そのことから、話すことについての変化は少なかった。

その一方で、コメントを書かせることの指導に重点を置いたことから、書くことに関わる肯定的な回答が若干増えたようである。

生徒が相手に分かりやすく物事を伝える力を身に付けるために、教師がその工夫の仕方について考えさせる活動を取り入れていくことが課題である。

## VI おわりに

大学院での二年間の学びと、各実習を通じて、新人教員としての資質を磨くことができた。以下に、

教師としての抱負を述べる。

### 1 授業作りについて

実習中、多くの先生方の授業を参観させていただく中で、生徒個人の特徴、学級の特徴を把握して授業を行うことが、誰もが安心して学校生活を送る基盤となると学んだ。中学生の心の変化や時代の情勢に合わせて、英語という言語を身に付けさせたい。

### 2 教師として

教師の仕事は授業だけではない。授業の合間の休み時間や部活動を通じて生徒の様子を絶えず観察し、生徒が学校で見せる様々な側面を捉えるよう心掛けていく。毎日の指導の中で、生徒と細やかに関わることで、生徒の理解を深めていくつもりである。

また、教師間の連携や協力が、三年間を通じて生徒を見守っていくことには欠かせないということ学んだ。職員室での何気ない会話の中に、先生方の生徒への愛情を感じる事ができた。私も来年度からの勤務では、先輩の先生や同輩と情報を共有しながら、効果的な指導を行っていききたい。

#### 【注記】

(注1)『中学校学習指導要領解説 外国語編』(文部科学省 平成20年)

(注2)『教育の方法』佐藤学(左右社, 2012年, p.102)

(注3)『どうする小学校英語—英語ざらいを出さないために』阿原成光・瀧口 優(大月書店, 2009年, p.11, p.23, p.31)

#### 【主な参考文献】

『教育の方法』佐藤学(左右社, 2012年)  
 『どうする小学校英語—英語ざらいを出さないために』阿原成光・瀧口 優(大月書店, 2009年)

『英語の授業づくりアイデアブック④』阿原成光(三友社出版, 2004年)

『時代を拓いた教師たち(2) 実践から教育を問い直す』田中耕治(日本標準, 2009年)

『中学校学習指導要領—外国語活動文部科学省』(東山書房, 2011年)

#### 【付記】

実習中は、多くの先生方に貴重なご指導ご助言をいただきました。お世話になったすべての方々に感謝申し上げます。

最後になりましたが、実習Ⅰ、Ⅱでご指導くださった山田久義先生、実習Ⅲでご指導くださった志水廣先生、そして、「学校サポーター」や実習Ⅰ、Ⅱ、報告書作成や学校生活において細やかに声を掛け、ご指導くださった大矢忠史先生に、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。